

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（文学）	氏名	深町 悟
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 ヴィクトリア朝期の小説における反帝国主義の流行とそのプロパガンダ的特長の研究			
論文審査担当者			
主査	教授	吉中孝志	
審査委員	教授	地村彰之	
審査委員	教授	新田玲子	
審査委員	法政大学 教授	丹治愛	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、ジョージ・チェスニー（George Chesney, 1830-95）の「ドーキングの戦い」（The Battle of Dorking, 1871）を起源とする「侵攻文学」（Invasion Literature）作品群において、プロパガンダ的手法がどのように使われ、受け継がれていったのかを、特に1871年から1882年までの期間に焦点を当てて分析を行ったものである。本論文は3部構成で、年代に分けて個別作品が論じられている。</p> <p>第一部では、まず「ドーキングの戦い」が、1870年の普仏戦争の結果、英国にもドイツが攻めてくるかもしれないという当時流行していた英国のアラーミズムを上手く利用した点を考察している。英国の決定的な敗戦が誇張された予測で描かれ、英国が間違いを犯し続ける一方で敵国が冷静に侵攻を進める描かれ方が分析対象とされている。読者の恐怖と共感を喚起することで自国の軍備増強を図ると同時に、拡張主義的帝国主義に異を唱える目的を持ったプロパガンダでもあることが指摘されている。</p> <p>第二部では、トルコを中心とする東方問題に絡めて1870年代に創作された「侵攻文学」作品を扱いながら、「ドーキングの戦い」との類似性と差異が論じられている。このジャンルの特徴の一つは、将来に起こりうる戦争を描いた架空戦記であるということであるが、その設定を使って『1883年の侵攻』（The Invasion of 1883, 1876）は、ボランティヤ隊改革の必要性を主張するとともに、反戦思想を有していること、『50年が過ぎ』（Fifty Years Hence, 1877）は、悪しき国トルコとの友好関係を解消するように読者を誘導しようとしている手法が解明されている。さらに『トルコの分割』（The Carving of Turkey, 1894）においては、『1883年の侵攻』と同様に英国の成功談を繰り返し宣伝することで外交姿勢についての主張、即ち「名誉ある孤立」を促すような主張が読者に刷り込まれる工夫がなされていること、作品中で既に第一次世界大戦規模の戦争が想定されていることが指摘されている。また、この作品において、「侵攻文学」に一貫して流れている、一般の外国人に対する警戒心、ゼノフォビアを喚起する手法が強調されていることも論じている。</p> <p>第三部は、『海峡トンネル、すなわち英国の破滅』（The Channel Tunnel; or England's Ruin, 1876）に続いて、1882年の海峡トンネル危機に関連して出版された「侵攻文学」作品を扱っている。『いかにジョン・ブルはロンドンを失ったか』（How John Bull Lost London, 1882）が殊更フランスへの嫌悪感を読者に喚起する手法を採っていること、さらに「海峡トンネルの話」（The Story of the Channel Tunnel, 1882）は、トンネル建設に反対するために賛成派の中心人物であったエドワード・ワトキンへ</p>			

の個人攻撃を利用していることが指摘されている。また、『ブローニュの戦い、いかにカレーが再び英国領となったか』 (*The Battle of Boulogne: Or, How Calais Became English Again*, 1882) についての分析では、この作品が英国とフランスとの二国間の関係に限定されている点で海峡トンネル危機を扱った「侵攻文学」の典型となっているという点だけでなく、他の「侵攻文学」がしばしば英国の海軍力が世界中に散らばっていたことを敗戦や侵略される原因と考え、拡張政策を批判する反帝国主義的立場を採るのとは違って、帝国主義を助長する目論見が埋め込まれている可能性があることを論じている。

リトル・イングランド主義、ゼノフォビア、そして反帝国主義との関連については論理の単純化が散見されるが、直接の分析対象となった作品だけではなく同時代の他の「侵攻文学」作品も丹念に読み込み、同時代の新聞、雑誌記事も論文中の考察対象となっており、これまで論じられることのなかった文献を文学研究の対象として発掘した功績は大きい。英国ヴィクトリア朝後期から第一次世界大戦までの歴史研究を充実させれば、さらなる成果が期待できる、優れた博士論文であると評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。